

ほんとの対話

杉山登志郎著

『子ども虐待という第四の発達障害』

評者・小林隆児



学習研究社
本体一七〇〇円

これまで広汎性発達障害 (PDD) を中心とした発達障害臨床において精力的に研究を蓄積してきた著者が、新たな臨床の場で真正面から虐待臨床に取り組み、この五年間に数々の知見を積み重ねてきた。それをもとに満を持して、子ども虐待を従来の発達障害とは異なった新たな発達障害候群として位置づけることの重要性を主張したのが本書である。

センセーショナルな響きをもつタイトルではあるが、内容は膨大なエビデンスに基づいた説得力をもち、子ども虐待が子どもの発達に及ぼす広範かつ深刻な影響に読者は驚かされる。

第一に、こころの発達のありとあらゆる領域へ子ども虐待が及ぼす持続的かつ深刻な影響である。愛着の障害に始まり、感情面、行動面、思考面、身体面などにおいて、どれひとつとして容易には改善しがたいほどの障害をも

たらしている。

第二に、このような広範なこころの発達の問題が、同時に明確な脳障害を基盤にもつということの深刻さである。よって、虐待への発達支援は、俗にいわれる「こころの治療」といった心理面の支援で片づくような安易なものではなく、生物・心理・社会的側面からの包括的なものでなくてはならないと力説する。

さらに深刻な問題は、傷ついた愛着の修復という作業は、ゼロからの出発ではなく、マイナスからの出発であるということの大変さであるという。

これらの心身面の障害像はすべての事例において驚くほど共通性をもつゆえに、著者は子ども虐待を、これまで明らかにされてきた発達障害群とは別に、新たな発達障害候群としてとらえなければならぬと主張する。

本書の圧巻は、子ども虐待とPDD

との関連である。被虐待児の二五%をPDDが占め、その九割以上が高機能群 (HFPPD) だという。またPDDの中で虐待を受けていたものが六・九%、HFPPDに至っては一割近くにも及ぶという。ここで著者は、子ども虐待によつて生じたつまりは後天的なPDD (様状態) と、社会性の発達の遅れを先天的にもつ (と著者はいう) PDDとの違いをくわしく論じている。PDDが先か、虐待が先かという二ワトリタゴ論争にあえて踏み込み、両者の違いは治療を行いながら観察していくことではほほ明らかになると言い切る。

人間の精神発達とは、誕生以来不断の対人交流の蓄積の中で練り広げられることは自明のことである。その中で子どものこころが析出してくるのだが、その基盤となつているのは愛着形成である。その不全がこころの発達全般に深刻な影響を及ぼすのは、こころの発達が、愛着つまりは子どもと養育者との深いこころの絆をもとに、かわり合いを積み重ねていくことで、いくえにも重なり合うように層をなしていくものだからである。そのような過程を経て、漠としていた子どものこころの輪郭が浮かび上がり、次第に複雑

な形をなしていく。愛着形成不全は、この過程を根底からゆがめる。虐待もPDDも子どもの精神発達に広範かつ深刻な影響を及ぼすのも当然の帰結である。

本書の登場は、これまでの発達障害概念を根底から覆す可能性すらもつている。従来脳障害を基盤にもつ発達障害とりわけPDDと環境因の強い虐待は対極に置かれていた。しかし、両者ともに愛着形成不全を基盤にもち、かなりの率で同じような障害像を呈することが明らかになった。素質か環境かの二者択一の問題としてとらえがちであった発達障害研究は、いよいよ曲がり角にきたといつてよい。

愛着形成不全がなぜこれほどまでに広範かつ深刻なこころの発達の問題をもたらすのか。それを明らかにするために、愛着形成あるいはその不全とそれをもとにしたかわり合いがどのようになつてこころの発達やその障害をもたらすのかといった問題に取り組みなければならぬことを本書は予感させる。発達障害臨床にかかわっているわれわれは、新たなテーマを突きつけられている。

(二)ばやしりゅうじ/東海大学健康科学部